

# 瀬戸内海域方言についての 方言地理学的研究

藤 原 与 一

## 〔目 次〕

### は し が き

1. 瀬戸内海域方言研究の目的……………215
2. 目的に応じる研究作業<計画>……………215
3. 瀬戸内海域方言についての方言地理学的研究……………217
4. 言語地図製作……………221
5. 言語地図製作の第一次・第二次作業……………230
6. 言語地図解釈……………232

### は し が き

瀬戸内海の大三島北部（愛媛県下）に生をうけ、ここのことばにはぐくまれて、比較的早く、言語の地域による相違に気づいた私は、いつしか、瀬戸内海域の方言状態を総括的に研究することをテーマにしていた。今となつては、これが私の終生のテーマの一つである。

これまでの四十余年、関心は、種々に発揮されて、いく種類かの研究活動となったが、今日かかわっている研究作業は、瀬戸内海島嶼全部と全沿岸重要諸地点とに対する方言地理学的研究、ならびに、それにつづく、島嶼重要諸地点の深部調査である。この段階にいたって、私は、多くの同学者の、あつい援助を受けている。じつに、これらの諸君との一致協力の活動によって、私は、目下の研究を推進し得ている。とりあえずは、岡田統夫・岡野信子・佐藤虎男・瀬戸口俊治の諸君の労を謝したい。調査活動に従事してきてくれた二十余名の諸君にも、くりかえし謝意を表したい。昨年度以来、言語地図製作に献身して

くれている藤田晏子・佐々木颯子・近藤和子・中村博枝のみなさんの努力も、ここに特記しなくてはならない。以下に私が「私ども」との言いかたをする場合は、これらの人々のことを合わせ思っ言うものである。

私はさきに、『方言研究年報』第四卷（1961年）で、「瀬戸内海全島嶼<sup>および沿岸地</sup>方言調査の課題と方法」について述べた。本稿は、それにつぐものである。

## 1 瀬戸内海域方言研究の目的

この研究は、瀬戸内海全島嶼にわたる全部落、および、全沿岸の相当数重要諸地点（第一段周辺と、その背後の第二段周辺と、二重の周辺をとる。）について、その方言を精査し、一大特殊地域と言すべきこの瀬戸内海域の全言語状態をとらえて、これに存する諸理法を、総合的に究明しようとするものである。瀬戸内海域の特殊性は、地中海域のそれに比照しても見ることができよう。かれに比較言語学的調査があるのに対して、これに方言地理学的討究その他の研究作業があつて然るべきである。瀬戸内海域の場合は、地中海域が諸言語を存せしめているのに対して、一國語下の方言状態である。一國語下の多島内海方言状態としては、瀬戸内海域が、世界に独自のものであろう。この、世界の方言研究上での独特の対象地域が、方言上、私どもに、どのような言語理論の帰納を許すか、討究の興味は津々たるものがある。

私どもは、緊密な協力研究態勢をくんで、調査作業の深化拡充につとめてきた。確実な資料の採択と、精確な資料整理とに徹することを旨として、事理究明の着実な道をあゆんできた。これまでのことと、今の方向づけとに、あやまりはないと思う。今後いよいよ、日本のこの特殊地域の、みずから語る研究誘導の声に聴従して、研究の開拓に邁進したいと思う。実態に即応する忠実な態度と、そこで産み出しうる方法とを以て、独創的な研究に励み、このフィールドから、世界の言語学に貢献したいと思う。

## 2 目的に応じる研究作業〈計画〉

所期の目的に向かって、私どもは、つぎのように、研究作業を展開させよう

としている。

1. 内海全域（沿岸地帯を含めて）に対する方言地理学的研究

これに第一次・第二次を考える。

目下、第一次の調査作業を完了しており、この結果を言語地図に製しつつある。

2 内海全域から、重要視すべき島々を選び、それらの島に一地点ずつ重要地点を選んで、それらの諸地点につき、もっぱら重点的におこなう深部研究

これに、第一次・第二次・第三次を考える。

目下、第一次の研究作業の二年めにはいつている。第一次の作業では小著『日本語方言文法の研究』をテキストとしての、表現法中心の一週間調査を完行しつつある。第二次作業では、語彙面を見ていくであろう。第三次作業では、第一次作業以来つねに見てきた音声面の整理、語彙面の深究、表現法に関する検討をこととするであろう。

3. 瀬戸内海文化事象の総合的研究を見こし、その基礎的役わりを自覚しておこなう、種々の総括研究

この段階では、1の方向と2の方向とをかみ合わせることにつとめる。1の方向からは、瀬戸内海言語図巻ができるが、2の作業結果を1に組み合わせれば、言語文化史的に深みのある言語地図ができて、瀬戸内海言語図巻は、瀬戸内海文化図帖の性格を具備するものとなりうるであろう。

2の作業結果からは、——たとえば語彙の面について言えば、重点調査結果を1の作業内容の上で処理することによって、内海特性語彙のひきしまった体系を得ることができる。

3の段階においては、総括研究の趣旨により、種々の補充調査がなされるであろう。また、3の研究が完成に近づけば、さらに発展的に、高次の研究目標が設定されるであろう。

4. 生きている瀬戸内海域の動きゆく将来に関連する研究

この前むきの研究姿勢のつねに入用なことは、言うまでもない。私どもは、すでに1の第一次作業の中でも、老年層に対する調査と少年層に対する調査とを、並行させている。

3の総括研究が発展すればするほど、4の研究態度が、より強くうち出されることにもなる。

### 3 瀬戸内海域方言についての方言地理学的研究

本稿にややくわしくとりあげようとするのは、上記「研究作業」の1のうちの、第一次作業に関することである。

さて、この方言地理学的研究のため、私はできるだけ合理的な手順をふむことにつとめた。

私としては、瀬戸内海は、自己の本来の生活圏の拡大として、実感を以てうけとることのできるものである。また、これに、数次の研究もおこなってきた。が、ひとまずそれらのいっさいを措いて、まったく単純に、私も瀬戸内海方言の一研究者となることにした。この態度設定が、本研究への私の出発点である。

昭和二十五年ごろ、いよいよ第一次の方言地理学的研究を大規模におこなうことを決意し、これに備えて、協同調査要員の基本的な訓練をはじめた。昭和三十一年度からは、見本島嶼に関する小規模の方言地理学的研究を試み、この中で、調査要員の基幹を養成し、調査項目を練成した。こののち、所定の調査項目による予行調査、実習調査をかさね、調査の具体的方法の修成につとめ、かつはしきりに協同調査の気運を盛りあげた。準備に時をかけること約十年、昭和三十五年になって、正規のしごとが本格的にはじめられた。

第一次調査の大勢を決したのは、昭和三十六、七年の二カ年である。これを中心とする五カ年が、私どもの主な調査期間であった。

三十六年度・三十七年度には、文部省科学研究費（総合研究）が下付された。この恩恵は深謝にたえないところである。

### 1. 調査要員について

その人は、愛宕八郎康隆・神部宏泰の二君をはじめとする二十余名である。多数であるほどよいことは言うまでもない。短期間に多くの地点を調査しうるからである。しかし、調査能力の均質性を考えると、ある程度に力の揃った調査者を多数得ることは容易でない。十年計画による二十余人、これが私の得ることのできた最善のスタッフであった。

それにしても、私の特筆しうることがある。諸外国と日本とを通じて、多人数の調査要員を継続的に養成して、一定目的の調査のためにスタッフを揃えたということは、あまりないのではないか。私どもの人的設備は、まず理想的だったと思う。これによって正確にして均質的な資料採取がおおよそ保証されることになった。

### 2. 調査項目・調査地点・調査対象者、調査期間

調査項目は二百四十項目である。これは、昭和三十八年に『方言学概説』（国語学会編）の「方言地理学の方法」（拙稿）の中で発表した。圧縮の結果として二百四十項目をとった経過と、二百四十項目の成す体系の意義とについては、言うべきことが多いが、省略する。限られたこれだけの項目の中に、文表現を観察する見地をはば広くとり入れたことは、新機軸と言ってよからう。

この二百四十項目の問いは、質問簿にしくむことなく、二百四十枚の調査カードにした。これのおのおのに、問いのことばの諸種を順序にかかけたり、答えの記録法を指示したりして、人が作業に私意を加えることのないようにしたのである。内外の大多数の地理学的調査が、質問簿方式であるのに対して、私どものものは変わっている。これが、のちの言語地図化作業に有効であることは明らかであろう。

調査地点は八百数十である。概数千内外が目あてであった。瀬戸内海域、この程度の広さにわたって、全部落を残さず対象地としたことは、内外の方言地理学的調査を通じて、稀有のことではなかったか。私どもは、はじめ、実情に即して三十戸以上の集落を目あてとしたけれども、のちに補って、部落と認められる形のものもみな調査した。（ただし、淡路島は、あまりにも部落が多く、

かつはそれらが群りあっているため、言語地図化のきわめて困難であることが見こされたので、まびき調査とした。このことについては、特に大事をとって、土地っ子の服部敬之君に、入念な検討をしてもらったのである。）

調査対象者としては、各地点ごとに、六十才台の老年者（女性一人）と、中学一・二年の少年者（女性二人）をとった。一地点一日の、老・少のこのような二層を対比した統一調査も、内外を通じて、私どもの実践が、早い方だったと思う。上の老・少のとりかた、その性別・人数のことなど、ことわるべきことが多い。

調査期間は、ほぼ五カ年計画という短期をねらった。なにぶん、採取資料は、のちに相互に比較すべきものである。比較されるものは、均質的であることが最重要である。であったら、時のへだたりの最少限の資料をあげるにしくはない。こういう、年限のきびしい限りかたにおいても、私どもの作業は、内外を通じて、たしかに異色あるものだったと思う。

年限はできるだけ短くしなくてはならないし、調査地点の網の目はこまかくして、地点数をできるだけ多くしなくてはならない。となつて、切り盛りすべきなのが調査項目数である。私は、調査項目数をおさえて、期間を短くすることにした。項目数のことは、第二次調査で、改めて解決することができる。（また、そのように、広域に関する統一調査は、整序すべきものと思う。）

上述の企図によって得た私どもの資料は、斉一的・均質的と認めうるものと、私は信じている。西洋例で、調査期間の長いのに無感覚的なものがある。また、調査員いく人かの実力差を意に介しないものがある。そうであつて、方言地理学的調査の厳密が期せられるであろうか。私どもは、採取資料の斉一性均質性の保持のために、調査上のすべての条件を整定しようとしたのである。残念ながら、結果に、いくらかの未熟なところがありはする。聞く力のことはひとまず措くとしても、聞きとったものを書きとめる方式を諸君がふむことに、不測の変差をおこしたのである。しかし、一同が、採取資料の正確と均質とを日ざして、つねに良心的に努力したことは、出色のことだと思っている。

### 3. 調査者と研究者

私は、要するに、瀬戸内海域に対する第一次の方言地理学的調査において、ほぼ理想的な調査態度を貫き得たと考えている。従来の内外の研究作業にかえりみて、進歩せしめるべきを進歩させ、よく、科学的方法を実現し得たと考えている。渾然とした調査要員団を動かして、一糸乱れない統一調査を無事にやり了えたことは、特筆したいところである。反省して、多少の欠陥は認めるに吝でないけれども、今日、集団運営の言語地理学的調査として、これだけの統一調査をしとげ、一連の安全資料をあげ得たのは稀な好例とされてよいと思う。

このような全員一致の活動を、積極的に推進し得たのには、つぎのようなことも、あずかって力があると考えられる。私どもは、調査者が、のちにその調査結果の集成されたところで、調査結果に関する研究者になる。

一調査者は、ある日、ある地点を調査しながらも、また、やがて自分が研究者として、全瀬戸内海域の全調査地点にわたる全体資料を処理研究する日を思わないではいられないのである。将来の責任を思えば、当の一地点の単純調査にも、おのずから熱がはいる。諸君は、調査の「研究」への発展を自覚して、前むきの努力をする。いわば、のちの研究のよろこびをたがいに想起しながら手をつなぐ調査集団がここにあり得た。このような「調査者」即「研究者」という、考えてみればきわめて当然なルールが、集団の中に設定されたことがよかつたのだと思う。私は、諸君を、調査の座において激励することに何の躊躇もなかった。むしろ各自の発展的な責任を強調して、全員の調査活動の統一に身を入れることができたのである。

統一調査あるいは集団活動には、一般に、中心となる徹底的な指導者がいろいろ。その人の、全体を掌握しての、積極的な活動が、つねに所定の全員を引き立たせるのでなくてはならない。単なる集合体は、多くの場合、協同研究活動体であり得ない。その集団員の運用としては、ともかくも、その人々に地道な調査活動を促して、やがて、その人々を着実な研究活動者に仕立てること（そこで自在の研究の天地を得させること）——この一系の指導を有機的なものに

することが肝要であると思う。

#### 4 言語地図製作

方言に対する方言地理学的研究においては、その研究の重要方途として、方言事象の地理的分布を総覧する言語地図を作る。言語地図は、問題の事項に関する事象分布図である。この言語地図作成については、考究すべきことが多く、言語地図作成そのことが、方言地理学の重要部分を成す。（早くから、言語地理学は言語製図学と言語地質学とより成る、と言われてきた。）

私どもは、第一次調査の結果を、去年度、その老年層の二百四十項目だけ、言語地図に製することができた。一項目につき二枚三枚の言語地図を作ったものもあるので、製作枚数は、二百五十枚にのぼる。

以下に、私どもの言語地図製作について、手順・方法を述べてみたい。（——「方言地理学における言語地図製作の方法」という一般論を日ざす。）

今は老年層に関するものができているところであるけれども、老・少の二層のものを、対照比較的に製図することが目標である。すでに今日も、一方で少年層のものを処理しはじめている。一定地域に関する言語地図として、老若二層対照のものができると、とりあえずはその二百四十通ができあがることは、注目されてよいことであろう。私はこの成果を、内外の学界にうたててみることを念としている。

今の製図の段階において、製図と、新しい調査とのために、昭和四十二年科学研究所補助金（総合研究）、昭和四十三年科学研究所費補助金（総合研究(A)）が与えられた。この大きな恩恵に、私どもは深く感謝しないではいられない。

##### 1. 言語地図の凡例（P.227参照）

一定項目たとえば「非戸」の呼称に関する全域調査事実を、言語地図化する際には、調査地点ごとに、調査結果を、ことばのまま記入する方法と、ことばを符号に替えて、その符号を押印していく方法とがある。近代の方法は、後者



を主としている。私どももまた符号法によっている。

このためには、まず全域調査事実（一定項目に関する）を適宜に分類して、分類の体系を得、これに適宜、符号を当てなくてはならない。ことばの分類の体系と、代理符号の体系とがあい応じる。このように対応させたものの一覧表が、すなわち言語地図の凡例である。言語地図は、この凡例にしたがって製作していく。

凡例の問題は、ことばそのものの問題と、符号の問題とに分かれる。

〔調査結果の「ことば」の処理〕

凡例製作は、私どものもっとも力をそそぐところである。最初に重く考えるのは、調査で挙がってきた全域資料を、一々正確に待遇して、どこまでも、一個々々の事実を忠実にとり守るということである。その一つ一つをそれとしてみとめ、それとこれとをみだりに統合するようなことはしない。（万一、統合した場合は、括弧づけをして、何と何とをどういう趣旨で統合したかを明らかにする。）複雑な事象群が出ているのに、製図の便宜上、それらを取りまとめて、単純化した図を作る、というようなことはしない。図はものに随って作るのである。製図の便不便を先だてて考えるようなことは厳につつしみ、事象群にただ応じて図を作るように努力する。凡例には、どんな場合にも、調査地点ごとの報告が、なんらかのかたちで（脚注によってでも）、みな整理されているようにしなくてはならないのである。

一地点から、二つ三つの答えが出ているとするか。たとえば「井戸」のことを「カ $\bar{ワ}$ 」とも「イ $\bar{ド}$ 」とも言うというなど。このさいは、そこにそのような二事実の併存することを併存の実情に即してとりあげなくてはならない。その隣の地点が「カ $\bar{ワ}$ 」としか言わないのであっても、それはそれでよい。双方、実情のままがとりあげられているのがたつとい。

方言地理学の理念にもつけば、言語地図を客観図として醇乎たるものにするのが第一義とされる。図上に製作者の独断があってはならない。このため、調査がまず厳格でなくてはならないし、ついで、採取資料のとりあつかい、すなわち記述の厳密が要求される。報告されたものは、左右することなく

そこに出す。時には、調査者のあやまりと思われるものも、出てきた事実として、その形のままに出す。

むろん、あやまりの形を図に符号で載せることはしない。凡例に対する脚注の欄で、このようなものは処理する。のちに改めて述べるように、私どもには、凡例につぐだいなもの、脚注がある。脚注と、それをふまえる凡例と、この全体が、当該項目に関する所定の調査結果のすべてをものがたるのである。しかも、図上の一隅の然るべき場所で、これが、ことを明細精確にものがたるので、人は、凡例（ついで脚注）に聞きながら、図上でその項目に関する全域調査の実際を、全部理解することができる。

調査地点数が多い場合、上のようにはからうことは、大変な作業となる。答えの二事実以上併存する所も多い。それらをよくとりあげて、全部を符号にして言語地図を作ることは、容易でない。けれども、実態がそれを要求しているのであれば、私どもは、その実態に随うほかはない。むしろ、どのような困難もこえて、実態に忠実に、ことをはこんでいくようにつとめなくてはならないのである。（——地点数を多くすることも、一つの基本的要諦であった。）

全調査事実を率直厳密に報道し得ている言語地図であるならば、後日、人がどのような場合にこれを解説する時も、凡例・脚注の製作者は安心である。解釈のしすぎがそこにおこったとしても、責任は解釈者にあるからである。——もしも、凡例の製作上、採取事象のとりまとめなどに私意が大きかったら、のちの分布図解釈者のため、そこを明らかにするノートをつけておかななくてはならない。（凡例で、読者と正当に語りあうことが必要である。）

#### 〔代理符号の設定〕

凡例では、分類された事実、たとえば、「井戸」の「イド」「カワ」「イガワ」「ツルイ」などに対して、図に押印するための代理符号を設定しなくてはならない。この符号の設定にも多くの考究すべきことがある。一つには、事象と事象との対応関係に応じて、その代理符号と代理符号とも、同形の対応関係を持つように、配意しなくてはならない。「イド」と「カワ」との、事象としての開きはかなり大きかろう。これらの代理符号も、たとえば、「○と◎」という

ような開きのものでなくて、もっと開きの大きいものにする必要がある。一項目、たとえば「めだか」とか「馬鈴薯」とかの、瀬戸内海域での異称の数は多い。（分布は複雑である。）こういう場合、各名称を観察して、全称呼の分類を組織することは、相当の大しごとである。さらに、この分類表に対応させて、関係よろしく符号をまくばることが、また大きいしごとになる。じつに多くの努力がそこにいる。

このような用途の符号としては、諸種のものが多数考察されていなくてはならない。類型・群落を考慮した符号創作がある。多色図とせず、黒色一色の符号でいこうとする私どもには、符号制定にも苦心があった。

多色を避けたのは、一つに、後日、言語地図を版にする場合の経費をおそれたからであり、二つに、色をも多く使って符号の体系を成就することは二次元に対する三次元の操作のむずかしさを伴うことになって、協同作業の場合、むしろ整一活動に不適當かと思われたからである。

複雑になる図相においては、符号の使いかたは、大様、つぎのようなものであってよいと考えている。すなわち、ひとまずは、図相が大局的にわかりやすい図となるようにすること、——そのように、巨視にたえる符号を使うこと。つぎに、図相をさらに精視したさいには、こまかな地域的相違がよくわかるようにすること、——そのように、微視にたえる符号を使うこと。つまり、第一段に巨視用符号（巨視的効果の符号）を、第二段に微視用符号（微視的効果の符号）を使って、彼我を組み合わすのである。

私どもは、三百種近い符号を用意している。大部分がゴム印である。

符号を、また、地域別にも使おうとする。もともと事象別に使うものであるけれども、かねて、地域別にも使って、それを、事象別用法と矛盾させないようにしようとしているのである。元来、言語地図は、事項ごとに作られるゆえ、できた言語地図を利用する研究では、二枚以上のものがいろいろに見くらべられるのが、むしろたてまえとなっている。この比較のための言語地図集では、そのおのおのを通じて、地域分布を直覚させる施符法があることは、ひじょうに望ましいことであろう。これを考え、私どもは、代理符号決定に、その

事象の分布の地域性を考えることにした。じっさいには、事象の地域分布を、例の調査カードで、明確に数量化する。たとえばAの事象が広島県下島嶼に偏在してその地点数三十、Bの事象がその南の愛媛県下島嶼に分布してその地点数十五というようなことがわかると、Aの事象に、かねて中国系分布の符号と定めてある○系の符号を与えることにつとめ、Bの事象に、かねて四国系分布の符号と定めてある□系の符号を与えることにつとめる。人がどの図を見ても、そこに○系の符号があれば、それはおよそ中国系のものの分布かと、判読してよいしくみである。事象は、たとえばAのつぎにもA'・A''とあるから、事象のための符号設定に私どもは追われる。それでいて、地方・地域のためにも考慮しようとするのである。こういう意図を実現した分布図は、私ども以前に、そうなかったであろう。しかし、方言地理学は、このようなものを要求しているのだと、私は考える。

一地点に事象が二つ以上併存することも多いことは、先にもふれた。事象の併存を図にするのには、調査地点の密集する、狭い紙上でのことゆえ、技術的な困難がある。けれども、私どもは、報告された事実と報告の様態とに忠実に代理符号押印位置の約束に随って、事象併存を図上に活写しようとするのである。精密な手法によってこれに成功しているが、このためには、基礎として、符号そのものの選択にも多くの配慮がいる。

以上、符号の設定、とりぎめを、縦横に、多角的に考えるべきことを述べた。「調査結果の『ことば』の処理」と「符号の設定」とは、ともに重要であるが、配符法は、ことに、言語地図製作上の生命線であると言えるかもしれない。初心の者も、このしごとにたずさわる時、配符法（符号配分）の重大さをすぐに痛感する。「符号」の図を作るのであり、言語地図は符号によって決定されるからである。

〔凡例での、「ことば」の分類掲出とそれへの符号配分と。—— そのおのおのの三段階法〕

調査項目によってもちがうことであるけれども、通常は、「ことば」（方言事象）の分類の体系が、相当に複雑なものとなる。これを凡例で正確に表示する

手段として、私どもは三段階法をとっている。すなわち基本的事実と思われるものは第一段の線に出す。その単純な付属形と思われるものなどは第三段の線に下げて処置する。基本的事実に類縁のものは第二段の線に位置させる。このような準則を立てている。項目の性質——たとえば文法上のこととか、音韻上の問題とか——によって、多少、弾力のあるとりあつかいをするが、三段に立て分ける精神はつねに通している。必要がなければ、第一・二段にとどまってもよいのである。

「ことば」（方言事象）の配置が三段階式であるのに相応させて、代理符号（「ことば」の前におく。）もまた当然に、三段階式としている。凡例上で、符号だけをたてに見とおせば、だれしも、諸符号がたてに三段の出はいを示して並ぶのを見うるであろう。（ものによっては二段・一段のこともある。）このような凡例は、早くも、見る人に、いろいろの解釈を促すはずである。読図上のいろいろなかぎ・目やすが、わかりやすい形で、ここに提供されている。私どもは、このような立体的な、むしろ動的な凡例を創製することに努力してきた。

私どもは、各方面から、凡例製作の徹底を目ざす。これまでの内外の研究に、記号法の一つにおいても、不徹底・不合理が、はたしてなかったか。厳密に追求すれば、非科学的と認められる場合が、あった。

## 2. 凡例についての脚注（P.228参照）

凡例を支えるものは脚注である。人が、凡例からはじめて、私どもの脚注を末端まで読み通して下さるなら、そこで、その項目に関する私どもの全域調査の全報告は尽きる。資料はすべてここに公開されているのである。

脚注の製作は、七つの項目によっている。（P.228参照 I、II、III、IV、V、VI、VII）七項目それぞれの記事があってもなくても、各脚注には、順序にこの一定の項目番号を出す。

私どもは、凡例に完全を期するとともに、脚注に完璧を期している。私どもの調査と製図法とを、この所に余さず表明して、私どもの作る言語地図の信憑性をここで確認していただきたいのが、私の意図である。

## 3. 凡例・脚注の一例

ここに、項目番号〔220〕の、「落ちる」という動詞についての調査結果〈老年層の部〉をとりあげる。

この凡例原案は、佐藤虎男君が作成した。他の二君がそれに意見を加え、原作者はそれらを勘案して、第二次の凡例案をうち立てた。藤原がそれを修訂した。（これは、のちに言う、第二次作業のもの。P.230）

今、これを、本誌での発表にかなうように、体裁をやや改めて、つぎのようにかかげる。

○	オチル [otʃiʔu]	<table> <tr><td>オッチル</td><td>2' 11</td></tr> <tr><td>オッタ</td><td>686</td></tr> <tr><td>オチョッタ</td><td>712<sub>1</sub></td></tr> <tr><td>オチトル</td><td>534<sub>1</sub></td></tr> <tr><td>オチコム</td><td>3116 3' 14</td></tr> <tr><td>オチクレル</td><td>319 416</td></tr> </table>	オッチル	2' 11	オッタ	686	オチョッタ	712 <sub>1</sub>	オチトル	534 <sub>1</sub>	オチコム	3116 3' 14	オチクレル	319 416
オッチル	2' 11													
オッタ	686													
オチョッタ	712 <sub>1</sub>													
オチトル	534 <sub>1</sub>													
オチコム	3116 3' 14													
オチクレル	319 416													



オツル  
[otsuʔu]



アエル  
[aɛʔu]



アユル  
[ajuʔu]



アダレル  
[adaʔeʔu]

アダレル	534 <sub>1</sub>
アダレオチル	212 <sub>1</sub> 6112 6128
アンドリクエル	343
アザレル	2' 14



アラレル  
[aʔaʔeʔu]



アワレル 76 (アワレチョッタ 769)  
[awaʔeʔu]



アダケル (アダケクイル 319)  
[adakeɸu]



ホロケル  
[hoɸokeɸu]



ボロケル  
[boɸokeɸu]



モゲル (モゲテオチル 6135)  
[mogeɸu] (784 784<sub>1</sub> 797)



コゲル 74  
[kogeɸu]



ドヤル 622  
[dojaɸu]

以上が凡例である。

◎数字番号は調査地点をあらわす。当の事象が寡少の地点にしか存しない場合に、地点番号を記す。

◎符号および「ことば」を列記するのに、三段階式の出はいり（この場合は二段にとどまっている。）をこしらえていることはもちろん、ものの前後に、ほどほどの間隔を設けたりもしている。これは、事象のへだたりに対応させたものである。（——間隔法は、たいていの場合、採用している。）

上の凡例に属する脚注は、下記のとおりである。主として佐藤君の作ったものである。（のちに言う第二次作業のもの。P.230）

I 符号化された事象に関する被調査者の説明（（ ）でかこむ）

(1) 新古・盛稀に関するもの

○アエル（昔からのことば） 3'6

○アダレル（稀） 366

(2) 意義に関するもの

○アエル（ごま・麦・粟などが落ちる。） 323

○アダレル

（風などでしぜんに落ちる。） 213 218 547 551 558 562 63  
64 66 67 611 5'5 5'6

（木をゆすぶると実が落ちる。） 217

（山桃・栗などの小さい実が落ちる。） 667 680 2'15

（稲・麦・粟・豆・ごまなどが熟れてこぼれ落ちる。） 323 366 379  
3104 3105 3106 626 634 681 687

（米・麦などの粉が落ちる。） 375

（無花果・桃などが腐って落ちる。） 3'5

（熟して、いたんで落ちる。） 585 696 6112

（花の実が熟れて朽ちて落ちる。） 5123

（花が腐って落ちる。） 3113 5116

（へたがぬけて落ちる。） 219

（小さいものが落ちる。） 376 585

（小さい時に落ちる。） 3110

（花が落ちる前について言う。） 697

○アザレル（梅の実などがしぜんにぼろぼろ落ちる。） 2'14

○アラレル（風でしぜんに落ちる。） 221

（棒で落とす時落ちるのを言う。） 228

○アワレル（粉が落ちるような場合を言う。） 727

II 符号化された事象に関する調査者の説明（〈 〉でかこむ）

○オチル〈チは [tʰi]〉 5'15

○オツル〈ツは [tu] に近い。〉 8'4

III 事象の符号化に関する語注



(1) 完了形で示された事象（例えばオチタ）には、その基本形（この場合はオチル）と同じ符号を与えてある。

#### IV 符号化していない事象

- オチクッセル（こどもが二階からマロピオチル。）3'4
- アダレル（昔、聞いたことがある。）5187  
（昔、言っていた。）2'10  
（めったに用いない。）212 361  
（田のあぜ土をぬった場合に、土が下に落ちる。）3110  
（人が落ちる。）352
- アッダレル（年寄りが言っていた。）0186
- アダレクニル（人が木から落ちる。）349
- アダケル（人・動物が落ちる。）057  
（人が落ちる。）1'6 1'7 1'8 1'9 1'12 1'13
- ホロケル（昔の者が言った。）5120
- ボロケル（昔の者が言った。）756  
（ほとんど用いない。）0138
- ナダレオチル 3'5

#### V 回答の得られなかった地点

317<sub>1</sub>

### 5 言語地図製作の第一次・第二次作業

私どもは、昭和四十二年度に老年層の部二百四十項目全部の製図を完成して、つづく今年度、改めて、その二百四十項目の言語地図の作り直しをおこなっている。過去のものを第一版と仮称し、今回のを第二版と仮称している。

第一版、すなわち第一次作業の成果も、図として、見るにたるものである。しかし、私どもはここにとどまらない。二百四十項目を成しおえた経験を活用して、さらに第二次的に作業をし直すことが有効と考えたのである。これが適切な実践であったことは、現在、私どもが痛感している。できれば、第三版・

第四版と改めていきたい。私は、一項目ごとに、十通の原図を用意している。  
（老・少の二層のため）

ちなみに、私どもの言語地図は、新聞紙大の全紙を、よこに三枚つないだものである。瀬戸内海の広さと、調査地点数の多さとが、最少限、これだけの大きさを要求した。

が、ひとまずは第二版を以てうち切る覚悟をせざるを得なくなった。このため、第二版は、第一版の「正」に対する「反」とすることなく、「正」に対する「正」ダッシュとしている。つまり、第一版のものよさを生かし、欠点を補正して、第一次作業結果の昇発展につとめているのである。（しかし、第二版となって、私どもは、符号の体系を全面的に検討し、多くのゴム印を作りかえて、新符号体系を作った。）

第二次作業において、凡例・脚注の改訂にたずさわる各人を、原案作成者とする。原則として、これに他の二名が意見を加える。原案作成者がそこで再度考究する。最後にそれを、私が責任をもって補修する。四名の研究員（岡田・岡野・佐藤・瀬戸口の四君）は、調査カードの処理から凡例・脚注の製作の末にいたるまで、すべて明細な一定の方式のもとで、協同の活動をしている。（改訂符号表による、ゴム印符号の用法一つにも、厳格細密なとりきめがあるが、整然と、それが四人に守られている。）私はこれらの四者を得て、まったく思いどおりに、「一線進行」のしごとをなし得ている。

できた凡例にもとづく製図押印には、当務者たちとの合議でねりあげた「製図工程明細書」があり、当務者たちは、みずからこれを守るときわめて厳格である。

このような組織のもとで、言語地図を精撰し、“第一版”・“第二版”の作業を継続してはたすことは、内外の斯界において、稀有のことであろう。できることなら、後日、両種の作業結果を並列して世に問いたくも思う。——こうした比較資料（二種の図）が、ものの解釈にいかにも有効なものであるかは、すでに、当方大学院での多少の演習で、人々も経験している。

老年者の部の第二次作業が終わったら、この成果に引き当てて、少年層の部

の図を作る。このため、上の第二次作業のおこなわれつつある現在も、少年層の部の調査カードの、一部処理をはじめている。これには、補助員の製図当務者にも参与してもらおう。この人々をただのアルバイトとしてではなく、研究者としても遇することは、たえず考えていなくてはならない。

※ ※ ※ ※ ※

以上4・5は、客観図としての言語地図の製作のため、どのように厳密な努力をしなくてはならないかを、簡略に述べたものである。上述の内容が、言語地図製作法の忠実・新鮮を意味するものであることは、私どもの信じたところである。

なお、言語地図の理想に関しては、考えるべきことが多い。事象分布の言語地図は、いきおい即物的なものになるが、それにしても、ここへいかに人間の言語生活の「生」の事実を色こくうち出していくかは、これからの課題である。私どもは、たとえば「あいさつことば」というような文辞を調査項目にとる方向からも、この課題にとりくもうとしている。

思えば、言語地図も、長い間、同じような形式のもとにあった。新しい形式の言語地図、出でよと、私どもはとなえたい。技法的に新しいのみではなくて、内容からして新しいものがつよく望まれる。——方言地理学の思想の発展が望まれるしだいである。

## 6 言語地図解釈

言語地図は、言語事実の公正な処理の、的確な表明として、意義がある。（——この表明のために、私どもは、言語地図製作の、あらゆる厳密と発展とを期している。）

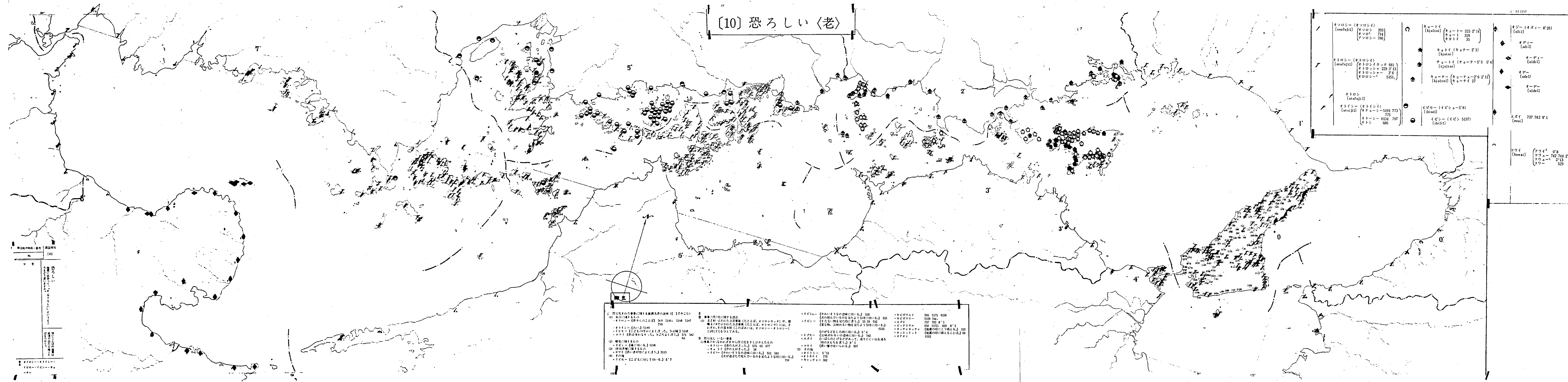
この、公正な処理の表明を、さらに、研究者が解釈するのが、方言地理学上、「言語の地質学」として約束されている領域である。ここで、私どもの製図数例をあげて、いくらか、その解釈に立ち入ってみることが、私の本稿での予定であった。が、今はそのための余白を失っている。やむを得ず、ただに図例を二つほどあげる。

ただここに、解釈の方向について、付言する必要をおぼえる。言語地図解釈の道は、いろいろにありうるのではないか。一義的にこれを考えることは、言語の地理学を浅薄なものにする。私は、解釈の方向を、大きく二つに分けて、方言事象地理学と、方言分派地理学とにしているのである。そのおのおのの中がまた、こまかく考え分けられる。いずれにしても、帰するところ、方言による言語の地理学は、人間の方言生活を深くえぐり、人間の地域的言語生活の原理と機能とを生き生きと描くようなものになることが理想的であろう。私は、方言分派地理学の方向を重んじている。

（43. 8 20）

（国語学国文学教授）

[10] 恐ろしい〈老〉



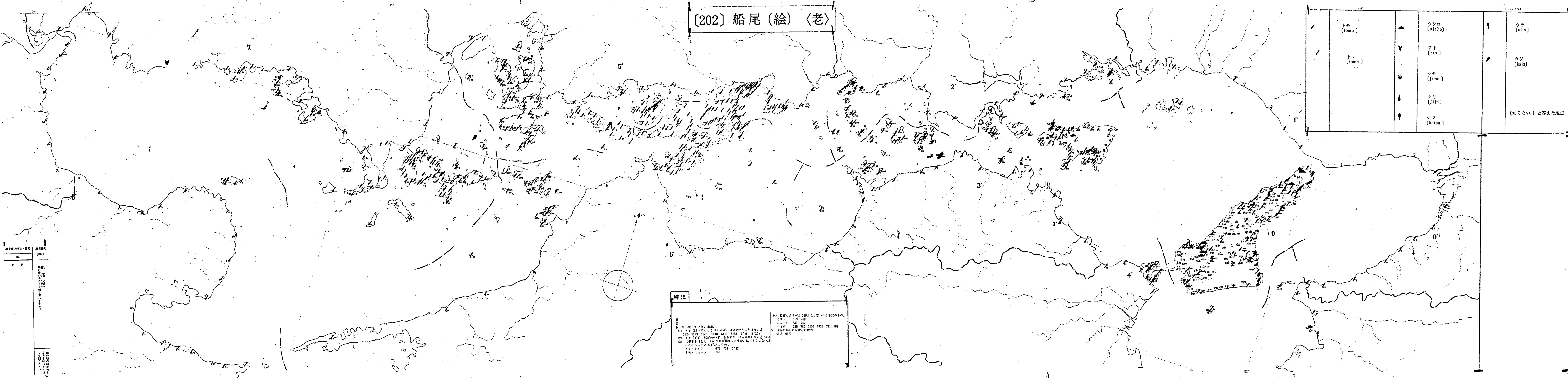
オソロシ (オソロシ) [osoroshi] (オソロシ 393 オソロシ 714 アソロシ 786)	キョトイ (キョトイ) [kyotoi] (キョトイ 225 2'14 キョトイ 318 キョトイ 35)	オジ (オジ 8'26) [oji] (オジ 8'26)
オトロシ (オトロシ) [ototoshi] (オトロシ 681 オトロシ 229 3'13 オトロシ 3'6 オトロシ 5151)	キョトイ (キョトイ 2'11) キョトイ (キョトイ 2'11) キョトイ (キョトイ 5'3 5'4 [kyotoi]) キョトイ (キョトイ 2'6 2'11) [kyotoi] (キョトイ 27)	オヂイ (オヂイ) [odii] (オヂイ) オヂ (オヂ) [ode] (オヂ) オヂ (オヂ) [odei] (オヂ)
オトシ (オトシ) [otoshi] (オトシ 5191 773 オトシ 775 オトシ 6134 797 オトシ 686)	イビセ (イビセ 5'8) [ibise] (イビセ) イビシ (イビシ 5137) [ibishi]	エズイ (エズイ 737 782 8'1) [ezu] (エズイ)

コワイ (コワイ 0'8 コワイ 742 744 2'3 コワイ 2'13 コワイ 529)
---

1. 訂正された事項に関する説明 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

訂正された事項に関する説明 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

[202] 船尾 (絵) <老>



トモ (tomo)	▲	ウシロ (ujiro)	!	ウラ (ura)
トマ (toma)	▼	アト (ato)	●	カジ (kaji)
	♣	シモ (jimo)		
	♠	シリ (jiri)		
	♣	ケツ (ketsu)		(知らない。)と答えた地点

調査地号  
No. (202)

調査地  
船尾 (絵)

調査者  
...

脚注

(4) 船尾とまちがえて答えたと思われる下記のもの。  
 ミヤシ 5153 768  
 ミヤシ 532 757  
 オキナ 335 392 5166 6123 711 764  
 回答の得られなかった地点  
 0145 0170

(1) トモ (聞いて知っているが、自分で言うことはない)  
 312 5143 5146 5148 5151 5152 719 8120

(2) トモ (船尾・船尾のいずれをさすか、はっきりしない) 5151

(3) トモ (船尾を指し、いづれが船尾をさすか、はっきりしない)  
 トモ・ミヤシ 679 768 6112  
 トモ・ミヤシ 333

A Dialect-geographical Study on the Seto Inland Sea Dialects  
of Japanese

Yoichi FUJIWARA

Our project is to make thorough researches into the Seto Inland Sea Dialects. You will find the special state of "inland sea" in this area which has many islands. It is expected that there must be a number of facts and problems worthy of particular notice. We hope to contribute to general linguistics by investigating and researching the Seto Inland Sea with many islands that have their own dialects.

Among a number of possible ways to approach these dialects is the dialect-geographical method. We accomplished several years of the field-work at more than 850 places in that area 5 years ago. (The linguistic items thus examined consisted of 240 words and sentences, which were the first-phase items in a larger scale of our investigation.) Two kinds of the results were obtained from women in their sixties and girls in their teens.

In the spring of 1968, we completed the linguistic maps, consisting of more than 240 sheets, of dialects spoken by the older group. Now we are endeavoring to improve them: that is, we are moving to the higher dimension in making the linguistic maps. When we can compare the original maps with those now in hand, both treating the same items, we must much more easily get a better knowledge of the geographical distribution of the Seto Inland Sea Dialects.

Before setting on the linguistic maps, we did our best to arrange all the phenomena (variants) of each linguistic item asked of the women in their sixties. We classified them most objectively without the least extra-linguistic prejudice. We were constantly on our guard against missing even the slightest phenomenon, so that each phenomenon is shown in a systematic table prepared for the purpose.

Then, we gave a symbol to each phenomenon classified. On the symbols we also tried to get the ideal system, corresponding to the classified one of the phenomena. Moreover, we showed the local tendencies of the distributions of the phenomena by using special symbols on the maps. For instance, we give the X series of symbol to the distributions of the phenomena of each item in the eastern part of the Seto Inland Sea. When anyone looks at this X series of symbol on the maps, he will immediately understand this represents the eastern locality of those phenomena in the Seto Inland Sea.

Under the tables of the symbols and the classified phenomena, we add the detailed footnotes, in which are shown all memoranda made by each investigator and all the explanations given by each informant.

We have described above some details of making the linguistic maps. In a word, we wish to show on the maps every information collected in the fieldwork and the subsequent mapping.

The present research has been conducted by an excellent team of cooperators such as Mr. Okada, Miss Okano, Mr. Sato, Mr. Setoguchi and Mr. Muroyama. Their help has enabled me to carry out my ideal of dialect-geographical researches. I also express my deep thanks to my former students, who are all able dialectologists. I think it is difficult to have a more cooperative and unified team. I make no doubt they will soon begin to make the dialectal maps of the Seto Inland Sea for themselves.